発表タイトル	豊後大友氏の居館と城下町－考古学の視点から－
発表者所属名	日本歴史研究専攻
発表者氏名	永越　信吾

１．本報告の目的

近年、発掘調査が進展している中世大分府内町遺跡から、戦国期の大名居館とその城下町の様相について考えてみる。

２．中世大分府内町遺跡－戦国大名大友氏の城下町－

中世大分府内町遺跡は大分川左岸の自然堤防（微高地）上に立地。遺跡の広がりは南北2.1 km、東西 1.7 kmである。14 世紀代に町づくりが始まり、守護・戦国大名の本拠が町として発展、16 世紀に貿易都市化した。20 代義鑑（当主期：1515～1550）、21 代義鎮（宗麟）（1550～1573）の時期に最盛期を迎えた。この時期キリスト教が布教されている。天正 14 年（1586）島津氏の攻撃で府内は焼失した。

３．大友氏館跡

大友氏当主の居館。これまでの発掘調査で 14 世紀後半頃に成立し、16 世紀第３四半期まで存続したことが判明している（５時期の変遷）。16 世紀の最盛期には一辺 200m四方の規模と拡大した。周囲は塀が囲まれただけで、土塁はない。内部で大規模な池を伴う庭園が検出されており、大名クラスの居館のステイタスを示すものと言えるだろう。

４．町の構造

大友氏館と万寿寺を中心に南北４本、東西５本の主要道を基準として町が形作られた。宗麟、22 代義統の代に町の整備が進んだ。

今在家町、万寿寺南側、ノコギリ町等で町屋が確認されている。これらの町屋は道路面に対し間口が狭く、奥行きが長い、短冊状の地割と考えられる。万寿寺南側では建物が道路沿い建てられ、奥には井戸、ゴミ穴などが掘られている。ノコギリ町では要道の軸線と異なる斜方向の道が検出されている。16 世紀後半の鍛冶炉跡や銅の炉跡などの遺構やフイゴの羽口といった出土資料から鉄製品の加工、硯の素材となる石材、目貫（刀装具）の土製鋳型などが出土しており、複種の職人がいたことが窺える。

５．貿易の拠点

16 世紀代南蛮貿易の拠点となり、中国、東南アジアの陶磁器類がもたらされた。大分川河口付近の「冲の浜」が船着き場と考えられている。また、秤であった分銅の出土から商業取引が行われていたことが分かる（※博多と同様）。

６．小結

発掘では城下町は碁盤目状の区画を基本とし、その内部の町屋区域は短冊状地割であったことが確認できた。居館のあり方は山口の大内氏館に類似する。大内氏とは姻戚関係にあり、大内系かわらけの多量出土等と絡め、町作りの共通性も今後考えたい。多種の職人が居た点では越前一乗谷朝倉氏遺跡と類似しており、生業の面からも検討していきたい。